『アエネイス』におけるニススとエウリュアルス
── dolus an uirtusをめぐって ──

上 村 健 二

序

ウェルギリウスのAeneis（以下Aen.）第９巻におけるニススとエウリュアルスのエピソードの中で，最も注目され，問題視されている箇所は，第446行の Fortunati ambo!（幸福な二人よ！）という詩人による呼び掛けであろう．使命を果すこともなく無残に殺された二人がなぜ fortunati と呼ばれるのであろうか．また，なぜ「ローマが続く限り忘れ去られることはないであろう」[1]などと言われるのであろうか．この部分の解釈は，エピソードのテーマや Aen.全体における役割にも大いに関連するものと思われる．

まず，詩人によって歌われる（それによって誉れを得る）こと自体が幸福なことであるとも考えられる[2]．しかし，その意味だけでこの二人のみをこれほど際立たせる必要はないであろう．

次に，恋人[3]として幸福であるという解釈もある[4]．確かに，そのような意味があることは否定できない．だが，その場合，448-9行のローマの国家を示す表現が問題となるであろう．即ち，純粋に個人的な幸福を表す際には，448-9 のような愛国的な表現は似付かわしくないように思われる[5]．

そこで，ローマ的美徳である uirtus というものが持ち出されることがある[6]．しかし，このエピソードの中には uirtus という語は現れず，また，その意味合いも問題となるであろう[7]．

さて，言うまでもなく，この箇所を解釈するには先行するエピソードの内容を充分に検討しなければならない．即ち，エピソードのテーマと Aen. 全体での役割を明らかにすることにより，この箇所の意味も自ずから理解されるであろう[8]．そこで，私は，このエピソードに dolus an uirtus（策略か武勇か）というテーマがあることを示したい．

I

dolus an uirtus という表現は，ニススとエウリュアルスのエピソードに現れるものではなく，Aen.第2巻に登場するコロエブスという人物の言葉である（2.390）．

dolus an uirtus, quis in hoste requirat?
策略か武勇か，敵に対する際には誰が問うだろうか．

コロエブスの策略は敵（ギリシア軍）の武具を身につけることである（2.387-93）．トロイア人はこれに従う（2.394-5）． この策略は，一時的に成功するが（2.396-401）， 結局は味方から攻撃されるという悲惨な失敗に終る（2.410-2）．

Aen.第2巻はギリシア軍の策略によってトロイアが滅びる様を描いたものと言える．コロエブスの策略の失敗はこれと対置されたものである．即ち，dolus はギリシア人にこそふさわしく，トロイア人（ないしローマ人）にはふさわしくないのである[9]．従って，ウェルギリウスは，dolus an uirtus という二者択一を提示することによって Aen. の世界では dolus と uirtus は相容れないものであることを示し， 他方，ギリシア人の dolus の成功とトロイア人の dolus の失敗を対置することによって Aen.の世界では dolus は否定的に描かれ，称賛されないことを示していると考えられる[10]．

さて，コロエブスには，ニスス・エウリュアルスとのパラレルが幾つか認められる．即ち，

(1)不幸な若者と呼ばれる（2.341, 345）[11]

(2)恋人（カサンドラ）への過度の愛情（2.343 insano…amore）[12]

(3)敵の武具を身につけ，破滅を招く（前述）[13]

(4)捕われた恋人を見て耐えられず，敵の真中へ突進する（2.407-8）[14]

などである．

Aen.第9巻において，これらのパラレルからコロエブスが，ひいては策略と武勇の対比という問題が想起される．或る意味では，Aen.第2巻における

dolus an uirtus という考えが，ニススとエウリュアルスのエピソードのテーマとして具体化されることになるのである（後述）．

II

ニススとエウリュアルスは Aen. 第9巻のエピソードに先立って第5巻の競技に登場する．そこで，この競走の場面 (5.286-361) と dolus an uirtusのテーマとの関連を考察したい．

先頭を走っていたニススは，犠牲の牛の血に足を滑らせて転倒するが，サリウスの前に身を投げ出してエウリュアルスを勝たせる (5.327-38) [15]．これに対し，サリウスは dolus によって奪われた誉れを返すように要求する (5.340-2) [16]．この正当な主張にもかかわらずエウリュアルスは人々から支持されるが，それは美しい肉体の中に現れている uirtus のためである (5.343-4)．

ここでは，dolus an uirtus のテーマは必ずしも明確ではなく，dolus によって得られたエウリュアルスの誉れはウェルギリウスの思想に反するようにさえ思われる．この，或る意味で未解決の問題は，Aen.第9巻のエピソードに受け継がれることになるのである（後述）．

III

Aen.第9巻におけるニススとエウリュアルスの企ては，アエネアス不在のトロイア人の陣営をトゥルヌスの率いるイタリア軍が包囲することに起因する[17]．そのトゥルヌスがエピソードのすぐ前で述べる言葉 (128-58) は，エピソードのための状況を作り出すだけでなく，実は，そのテーマ (dolus an uirtus) を予示する役割をも果しているのである．以下で，9.150-3を考察する．

第一に，「暗闇」(tenebras 9.150) はニススとエウリュアルスの夜間のエピソード（この点で第2巻と共通する）を予示する．第二に，パッラディウムの盗み (9.150-1[18]) は，ディオメデスとウリクセス（オデュッセウ

ス）の仕業である（cf.2.162-70）．この二人の組合せは，第２巻を想起させると共に，ニススとエウリュアルスのエピソードを準備する．このエピソードは Ilias（以下Il.）第１０巻をモデルとしているからである．第三に，9.152 では木馬の計略が示される．これは，第２巻で描かれたギリシア軍の dolus の最たるものである．

これら（9.150-2）と対置されるのが 9.153 である．即ち，白昼，正正堂堂と（luce palam[19]）戦うというトゥルヌスの決意が示される．全体としてトゥルヌスは「我々はギリシア人のように策略は使わず，公然と戦うつもりだ」と主張しているように思われる．

ここで想起されるのは，Odysseia（以下Od.）1.296 と 11.120 に現れる「策略によってかそれとも公然とか」（ἠὲ δόλῳ ἠ ἀμφαδόν）というモチーフである[20]．即ち，Aen.9.150-2（全体として dolus を表す）が δόλῳ に対応し，9.153 のluce palam が ἀμφαδόν に対応するものと思われる．この対応は，無論，dolus an uirtus のテーマにもつながり，このテーマを予示すると考えられる．また，Od. における二者択一（策略によってかそれとも公然とか）が復讐の方法をめぐるものであることも，ニススとエウリュアルスのエピソードに関係するのである（後述）．

Ⅳ

ニススとエウリュアルスのエピソードの最初の部分（9.176-223）は，主としてこの二人の対話から成る．ここで描かれるのは若者二人の愛情とヒロイズムである．ここに示された，誉れのために死をも恐れぬ英雄的精神は，uirtus に属するものと言えよう．

次の部分（9.224-313），即ちトロイア人の会議でも，二人の勇気が示され，それがアスカニウスやアレテスに称賛される．しかし，ここにはuirtus よりもむしろ dolus を暗示する要素が認められる．即ち，ニススは自分たちの企てを insidae（策略[21]）と呼び（9.237），企てそのものが dolus であることを示すのである．

更に注目すべきなのは武装（武具の交換）の場面（9.303-7）である．こ

の場面のモデルは Il.10.254-71 である．Il. においては，ディオメデスとオデュッセウスは眠っていたところを起されて会議に出て来たので武装が不完全であり[22]，それ故にトラシュメデスとメリオネス（夜警隊の指揮官）が武具を貸すのである[23]． これに対し，Aen. ではそのような必然性がない[24]．従って，ここには何らかの別の意味があると考えられる．即ち，後の場面を予示し，或いは伏線を敷くのである[25]．

最初に，9.303-5 でアスカニウスがエウリュアルスに剣を与える（Il.10.255-6 と 260-1に対応）． 象牙の鞘（305）の剣は，Od.8.403-5（パイエケス人エウリュアロスがオデュッセウスに剣を贈る）に由来するとも考えられている[26]．そうだとすれば，エウリュアルスとオデュッセウスのつながりが一層強められることになるであろう．

次に，9.306-7 でムネステウスがニススにライオンの毛皮を与える （Il. では武具を与える場面ではなく 10.177-8 に対応する）．これは，ニススを（Il. におけるディオメデスと同様に）ライオンに喩える箇所（9.339-41）を先取りしたものと思われる（この比喩については後述）．

最後に，9.307 でアレテスがニススと兜を交換する（Il.10.257-9 と261-71 に対応）．Il.では兜は両方とも皮製であり（257-8，261-2），ドロンの兜も同様である（10.335）．これは，光が反射して敵に見つかることのないようにするためだと考えられる[27]．それに対し，Aen.ではいかなる兜であるかは描かれない．あたかも，ニススらは兜の選択に全く注意を払っていないかのように感じられる．それ故，このことは，後にエウリュアルスが敵から奪った兜に光が反射して敵に見つかる（9.373-4） ことへの伏線であると思われるのである．

そこで，二人の敵中行（9.314ff.）のうちから，まずエウリュアルスの行動を追うことにする．ニススによる殺戮（324ff.）に続いて，342ff.でエウリュアルスによる殺戮が描かれる．350 では，エウリュアルスの行為を総括する形で，furto という表現が用いられている．この語は，ここでは，密かな攻撃，即ち一種の dolus を意味する． 他方，この後に描かれるエウリュアルスの「盗み」が furtum という語によって予示されている．

エウリュアルスは 359ff. でラムネスの武具を奪うが，このラムネスはニ

ススが殺した敵である（324-8）．自分が倒した相手の武具を奪って身につけることは英雄叙事詩中の人物の行為として理解できるが，この場合はそうではない[28]．更に，エウリュアルスはメッサプスの兜を奪う（365-6）．メッサプスは殺されたのではないから，この行為は「盗み」と言える[29]．その後，この兜が光を反射して，二人は敵に発見される（373-4）．また，エウリュアルスは，略奪品が重荷となって（384-5[30]），ニススとはぐれるという最も不幸な事態に陥る．

以上から，ウェルギリウスがエウリュアルスの盗みを否定的に描いていることは明らかである．従って，ウェルギリウスは，342-50 のエウリュアルスによる殺戮を furtum と呼ぶことによって，この行為を否定的に見ていることを暗示したのだと考えられる．つまり，エウリュアルスによる殺戮は，uirtus とは相容れない dolus なのである[31]．

次に，ニススの行動を考える．324-38 でニススによる殺戮が描かれるが，これはエウリュアルスの行為と同種のものであるから，やはり否定的に描かれていると推測できる．それを裏付けるのは，ニススをライオンに喩える比喩（339-41）の中で用いられた turbans（339）という表現である[32]．なぜなら，これがニススの後の行為，即ち，敵を混乱させる（409 turbare）という策略（dolus）を予示していると思われるからである．

ニススは，エウリュアルスが捕えられたことを知り，どうすべきか思い巡らす（399-401）．選択肢の一つは，死を覚悟で敵の真中へ飛び込むことである（400-1）．しかしこの考えは採用されず，ニススは槍を投げることによって敵を混乱させることを（409 turbare）意図する（402ff.）．ここで，ニススは，dolus（409）か uirtus（400-1）かの二者択一を迫られているのである．

ニススはdolusを選択する．これは一見成功するかのように見える．即ち，ニススの槍によって，スルモーが倒され（411ff.），敵は混乱し（418 trepidant），タグスも倒される（418-9）．その際，スルモは熱い流れを（414 calidum … flumen）吐き出し，タグスの頭には槍が熱くなって（419 tepefacta）突き刺さる．これに怒った敵の隊長ウォルケンスはエウリュアルスに対して「お前が熱い血によって（calido…sanguine）両者のための罰（復

讐）[33]を受けよ」と言う（422-3）．つまり，エウリュアルスを救うための策略が，逆にその死を招くのである．

エウリュアルスに死が迫り，ニススは「すべて私の罪だ（428 mea fraus omnis）」と叫ぶ．fraus という語は，ニススの言葉としては「罪」の意と思われるが[34]，もちろん，欺き，策略をも意味する．つまり，ニススの行為が dolus であったということがここで改めて示されるのである[35]．

ニススの叫びにもかかわらずエウリュアルスは殺され（431ff.），ニススは敵の真中へ突進する（438）．これは400-1に対応する．即ち，二者択一のうち最初は選択されなかった uirtus の方が── もはや選択肢ではなくなっているが── ここで描かれるのである．ニススは自らの命を失いつつもウォルケンスを倒し，復讐を果す（441-3）．この復讐が uirtus によって成し遂げられた点に，Od. における求婚者たちに対する策略による復讐との対比を認めることができよう．

444-5 でニススとエウリュアルスの描写は締め括られる．445 には復讐を果したニススの一種の満足感が感じられ，187 との対応が見られる[36]．しかし，444-5 には Aen. 第５巻との対応も認められる．ニススは，5.327ff.（特に333-5）で，血の中に倒れながらも（333），エウリュアルスへの愛を忘れず（334），サリウスの前に身を投げ出した（335 sese opposuit）．それと同様に，ニススは，9.444-5 で，刺し貫かれながらも，息絶えた友の上に，身を投げ掛けた（444 sese proiecit）．第５巻では dolus によって誉れが得られ（cf.5.342），そこでは一応認められたが，dolus による誉れは本来はウェルギリウスの思想に反するものである．それ故，ウェルギリウスは，第９巻のエピソードにおいて，dolus による失敗を uirtus によって償う（ uirtus による復讐によって誉れを回復する）という形で，この問題に決着をつけたのである[37]．

V

以上のような観点から，Aen.9.446-9 を再検討し，合せてこのエピソードの総括を行いたい．ニススとエウリュアルスは誉れを求めて危険な任務に志

願した．この勇気は uirtus と呼ぶこともできよう．しかし二人の行動の内容は dolus であった．Aen. の世界では，dolus によって誉れを得ることはできない．従って二人の企ては失敗する． しかし，最後には，uirtus を発揮する場が与えられる．即ち，ニススによるエウリュアルスのための復讐は dolus によってではなく，uirtus によって成し遂げられる （これによって dolusによる失敗が償われ，誉れが回復される）．この点で両者とも fortunati (9.446) であると言えよう[38]． また，この二人がローマが続く限り記憶される (9.447-9) のは， dolus によってではなくローマ的美徳である uirtus によって誉れが求められるべきだ， というウェルギリウスの思想がこのエピソードに具現されている (cf.9.446 mea carmina) からだと思われるのである．

注

(1) 9.448-9 の解釈は細部においては問題がある（例えば，449の pater Romanus が誰を指すか）ものの，全体としては「ローマが続く限り」と解して差し支えないであろう．

(2) A.Thornton, The Living Universe, Dunedin 1976, 164.

(3) ニススとエウリュアルスの関係は，「友情 (amicitia) 」 と呼ばれることも多いが，「愛情 (amor) 」の方がふさわしいであろう． Cf.Aen.5.296, 5.334, 9.182.

(4) G.Williams, Technique and Ideas in the Aeneid, New Haven/London 1983, 205-7, R.O.A.M.Lyne, Further Voices in Vergil's Aeneid, Oxford 1987, 234-6.

(5) 9.446-9 は personal voice であるとして epic voice を否定する Lyne の主張 (ibid.) にはやや無理があるように思われる．

(6) 特に uirtus が amicitia と関連付けられることがある：Thornton, op.cit., 171-2, 根本英世，「友情の賦 —— ニススとエウリュアルスの場

合（Aen. V, IX）――」，『ギリシア・ローマ神話の形成と変質』，1984, 75-6. なお，A.Cartault, L'art de Virgile dans l'Énéide, Paris 1926, 667は「ニススとエウリュアルスのエピソードはヒロイズムのみならず友情の賛美でもある」と言う．他に，B.Otis, Virgil : A Study in Civilized Poetry, Oxford 1964, 388-9, P.Colmant, L'épisode de Nisus et Euryale ou le poème de l'amitié, LEC 19 (1951), 89-100（特に98）参照.

(7) 眠っている敵を殺戮（cf.Aen.9.342 caedes）することは uirtus として描かれてはいないと考えられる（後述）．また，危険な任務に敢えて志願する勇気は uirtus であるとも言えるが，企て自体は完全に失敗する.

(8) この点で，エピソードが ――二人の愛情（友情）については別として――肯定的に描かれているか否定的に描かれているかが問題になる．G.E. Duckworth, The Significance of Nisus and Euryalus for Aeneid IX-XII, AJP 88 (1967), 129-50は，furor とそれへの罰がテーマであると論じ，トゥルヌスとの関連を強調する．その場合，Aen. 9.446-9 の解釈が困難になるが，Duckworth はこの部分には特に触れていないようである．この部分を K. Quinn, Virgil's Aeneid : A Critical Description, London 1968, 206 は ironical だと言う．逆に，Thornton, op.cit., 164-72 はエピソード全体が肯定的に描かれていると主張し，ニススによるエウリュアルスのための復讐をアエネアスによるパッラスのための復讐と結びつけている.

(9) cf.G.Williams, op.cit., 256.

(10) 岡道男，「古代叙事詩の序歌――『アエネイス』について――」，『西洋古典学研究』26, 1978, 1-22（特に13-5）参照．これによれば，Aen. におけるアエネアスは「勇武の人」として「策略の人」オデュッセウスと対比される英雄である．Aen.冒頭の arma uirumque が「勇武の人」を意味するかどうかを別にしても，武勇と策略の対比というテーマは認められよう．従って，dolus an uirtus は Aen. 全体にわたるテーマであるとも言えるのである.

(11) infelix については cf. 5.329, 9.390, 9.430. iuuenis については cf.5.361, 9.249, 9.399.

(12) cf.9.430 nimium dilexit.

(13) エウリュアルスとのパラレルであるが，これについては後述する．

(14) 2.407～9.424-6, 2.408～9.400-1, 438.

(15) Il.23.773ff.では小アイアスが犠牲の牛の汚物に滑って転倒し，オデュッセウスが勝利を得る．これはエウリュアルスとオデュッセウスのパラレルと言える．

(16) cf.Il.23.585.

(17) G.N.Knauer, Die Aeneis und Homer, Göttingen 1979², 266ff.(特に 272-5) によれば，ニススとエウリュアルスのエピソードは Il.の第９巻と第１０巻を組合せたものである． 即ち，Il.ではアキレウスの不在の故にアキレウスへの使節が派遣され（第９巻），偵察が行われる（第１０巻）のに対し， Aen. ではアエネアスの不在の故にアエネアスへの使者が派遣される．ここで注意すべきことは， Il.における二つのモデルの両方にオデュッセウスが中心人物としてかかわることである．

(18) R.D.Williams, The Aeneid of Virgil, Books 7-12, Basingstoke/London 1984 (1973) , ad loc.などは 9.151 (≒ 2.166) を interpolation と見做している． その場合，150 の inertia furta は単に英雄的でない策略 (dolus) を意味することになる．実は，furtum という単語に「盗み」と「策略」の両義性があることが重要なのである（後述）．ここでは 9.151を削除しない．

(19) tenebras (150) , caeca (152) との対応が指摘されている．Cf.R.D.Williams, op.cit., ad loc., F.Plessis-P.Lejay, Œuvres de Virgile, Paris 1945 (1919) , ad loc.

(20) このモチーフについては，岡道男「ホメロスにおける伝統の継承と創造」（創文社，1988）第１部第５章「オデュッセウスとテレマコス」を参照のこと．

(21) insidiae という語は Aen.の中でしばしばギリシア軍の策略（特に木馬）を指して用いられる (1.754, 2.36, 2.310) ．また，ニススは 9.243 で 「道は我々を欺かない」と言うが，「欺き」は dolus に通ずる．243 は 385（エウリュアルスを恐怖が道の方向において欺く）への伏線であろう．

(22) 例えば，ディオメデスの剣について，cf.Il.10.256.

(23) Cf. M.M.Willcock, The Iliad of Homer, Books I-XII, ad 10.255, 260.

(24) Cf. W. A. Camps, An Introduction to Virgil's Aeneid, Oxford 1987 (1969), 135.

(25) この場面での文脈上の意味としては，感謝や励ましの気持ちを示すと共に，連帯感を強めるために武具を与えるということであろう．

(26) J. Conington - H. Nettleship, The Works of Virgil, Vol. III, Hildesheim 1963 (London 1883³), ad loc.

(27) Cf. Willcock, op.cit., ad 10.255, 260, 334-5, R.B.Schlunk, The Homeric Scholia and the Aeneid, Ann Arbor 1974, 69-70. 但し，メリオネスの兜の外側には猪の白い牙がびっしりと付いている (10.263-5) ことを考慮すれば，この兜が光の反射を避けるためのものとは考えにくい．そこで，オデュッセウスらは敏捷性のために軽い兜を借りたのだとも考えられる．もしウェルギリウスがこのように解釈していたとすれば，兜の選択に関するニススらの不注意さは，後にエウリュアルスが略奪品が重荷となって逃げ遅れる (9.384-5) ことへの伏線と考えられよう．

(28) 364でエウリュアルスはこれらを身につけるが，この際，nequiquam という語が使われている． これが aptat にかかるとすれば，武具を身につけたけれども守りにはならないことを予示する． 他方，fortibus にかかるとも解される (cf. Conington-Nettleship, op.cit., ad loc.) が，その場合，「むなしくも勇敢な」とは， エウリュアルスが本来持っている uirtus が発揮されていないこと，即ち，ここで描かれた行為が uirtus とは相容れないものであることを暗示しているように思われる．

(29) ウェルギリウスが Aen.9.359ff.を描く際に Il.10.266ff.を念頭に置いていたことは間違いない． Il.では，メリオネスがオデュッセウスに与える兜の来歴（この部分は Aen.9.303ff. の武装の場面には採用されていない）が語られているが，それにはこの兜の盗みが含まれる （267は盗みを示す．アウトリュコスについては cf.Od.19.394-7.）．Aen.においては，武具の来歴は 9.360-3 で語られ（Il.との語句の対応については cf.Conington-Nettleship, op.cit., ad 9.360, 361, 362.），兜の盗みの方は 9.365-6で

語られるのである.

(30) 注(21)を参照. 「欺き」を暗示する語としては fallacis (392) や fraude (397) もある.

(31) トゥルヌスの言葉 (9.150-2) に対応する. 注(18)を参照.

(32) この文脈では turbans は「荒れ狂って」と解される (cf.R.D.Williams, op.cit., ad loc.). 文脈上の意味と予示された意味とは相違する傾向があるように思われる (例えば 350 furto).

(33) poenas (422) は, この後に描かれるニススによるエウリュアルスのための復讐を予示するが, これ自体既に356で予示されている. 356では, 特定の人のための復讐や罰ではなく, 単に, 陣営を包囲している敵を殺すことをpoenaeと呼んでいるようである. この点は注(32)を参照.

(34) Cf. Conington - Nettleship, op.cit., ad loc., Plessis-Lejay, op.cit., ad loc. この場合も文脈上の意味と暗示された意味との両義性があると思われる.

(35) 9.425の se celare tenebris (暗闇に隠れていること) も dolusを示している. これは, 既に検討したトゥルヌスの言葉に対応しているのである (9.150 tenebras, 152 caeca condemur in aluo).

(36) Thornton, op.cit., 169, Duckworth, op.cit., 140.

(37) ニスス・エウリュアルスを含めて, Aen.第5巻と第9巻には密接な対応が認められる. Cf.Camps, op.cit., 56-7, Otis, op.cit., 273.

(38) ローマでは (特に Aen.では) uirtus のみが誉れの対象となり, 誉れを得る者は fortunatus と呼ばれる. 例えば, Aen.第6巻でエリュシウムに住むのは誉れを得た者であり (648-50, 660-4), 幸福な霊 (669 felices animae) と呼ばれ, この地は「幸福な森の快い緑地 (638-9 amoena uirecta fortunatorum nemorum)」などと呼ばれる. また, 第11巻でトゥルヌスは講和を勧めるラティヌスに対して「いつもの uirtus があればよいのに」と悔しがり, 戦いに倒れた者こそ fortunatus だと言う (415-8).